

熊本県立大学

開学五十周年記念誌



熊本県立大学

開学五十周年記念誌

1947 - 1997

Prefectural University  
of  
Kumamoto



50 Years History

# 熊本県立大学歌「宙へ」

作詞 宇内 悅子

補作詞 熊本県立大学大学歌歌詞編作委員会

作曲

三枝 成彰

山脈を覆う 雲はながれ  
みどりの裾野 姿現す  
高く碧い 宙に向ける

きみの瞳

友よ

赤く

共に学ぶ

よころびに

燃えている

いま

力蓄めて 冬を越して  
けやきは 宙へ 梢を伸ばす  
胸の奥で 今昂る

きみの思い 若さに満ちて

友よ

確かな

耳で聞き

眞実

見分ける

目を持とう

答え探し

かざらすに

語り合う

いま

宙へ伸ばす 若い理想は  
知識の泉 世界をつなぐ  
いまを生きて 前に進む  
きみの笑顔 自信に満ちて  
友よ 遙かに 目指すもの  
秘めて 光の中 ゆこう  
明日の扉 押し開き  
飛躍する いま



大学が大学であるのは何によってでしょう。

大廈高樓、宏壯なキャンパスがそれでは、よも、ありますまい。歴史の古さ、規模の巨大さも、徒らに年老いたアンモスになぞらえられるだけ。ノーベル受賞者の有無やその数すら、眞の決め手とは思われません。

いわんや、大学という大仰な虚名の故では到底ありうべくもない。

## 志の軌跡



熊本県立大学 学長  
手島 孝

私は信じます。

世代も性別も国境も貫いて赤々と脈打つ学問への不屈の志、これこそが、そしてこれのみが大学をして大学たらしめる、と。

只管この志そのものによつて、私どもの大学の礎は築かれたのでした。爾來五十星霜、三度の所替えと三回の脱皮、そして幾多の辛酸を経て、志はいよいよ強く、いよいよ固いものがあります。

いま、来るべき新世紀を望んで、私どもはあたらめて素志に思いを馳せ、ますますその振起にこれ努める覚悟です。

## 熊本県立大学の理念

### 一、総合性への志向

本学は、人文・社会・自然の学問の三分野をおおう総合的な大学として、学際的な方法による総合的な知識の形成と学問の創造を目指す。

二、地域性の重視

本学は、〈地方の時代〉とも言われる現状において、地域の社会と住民に開かれたものになること、地域社会が当面する諸問題を分析し解決すること、地域の文化の創造の一機関となることを目指す。

### 三、国際性の推進

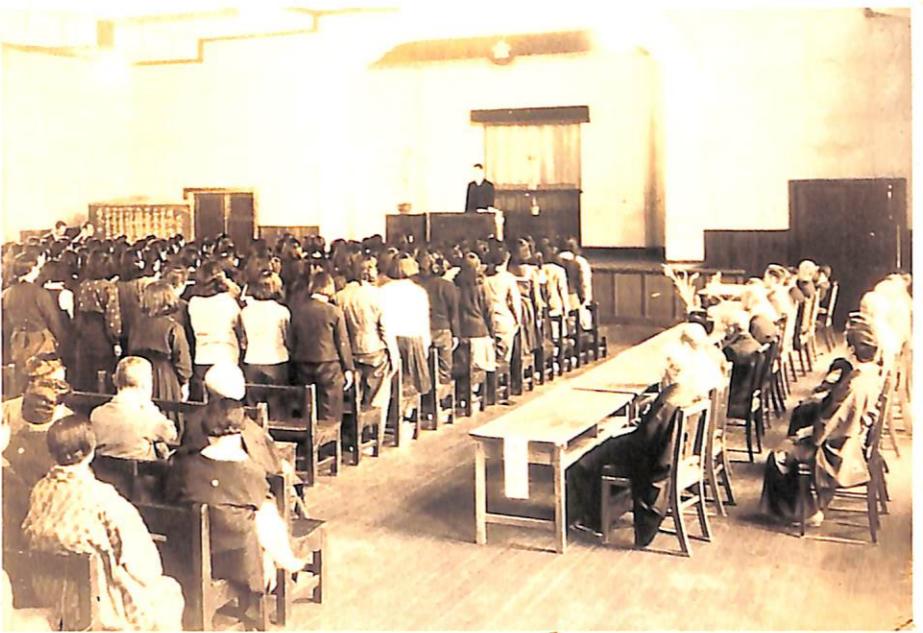
本学は、〈国際化〉の時代に対応して、西欧の文化とともにアジアやわが国の文化を学びながら、世界の人々との交流をすすめ、国際的・多元的な文化的な創造を目指す。



# 県立熊本女子専門学校・熊本女子大学創設期

## 二つの仮校舎で

昭和二十二年四月、熊本に初めての“女子最高学府”が誕生した—熊本県立女子専門学校である。一般的の専門学校や高等学校（旧制）に女性の入学が認められていなかつた当時、その開校は幾多の困難を乗り越えた末のものであつた。二十四年四月には熊本女子大学に昇格。以後、南九州唯一の公立女子大学として、多くの人材を県内外に送り出すことになる。



■第1回熊本県立女子専門学校の入学式

3年制の熊本県立女子専門学校は熊本市藪之内（現・同市城東町、熊本ホテルキャッスル付近）にあった県立第一高等女学校内の仮校舎で産声を上げた。初代学長には医学博士の北村直躬氏が就任。教官7人、事務官2人、その他7人に英文科・被服科・保健科の3学科の学生を合わせて130人のささやかな体制でのスタートである。昭和22年5月10日、第一高女講堂での季節遅れの入学式が、その第一歩であった。



■二つの表札を掲げた第2の仮校舎

昭和23年9月、女専は第2の仮校舎となる旧陸軍第六師団司令部跡に移転。24年には女専が熊本女子大学（女子大）に昇格したため、25年5月まで二つの学校が共存することになった。写真是25年3月、女専生活科1回生の卒業記念写真。玄関には二つの学校名を掲げた表札が見える。



■桜咲くころの旧陸軍第六師団指令部跡仮校舎で、瀟洒な木造の洋館で学生たちが集うる春の日

■大江の新校舎で手芸の授業を受ける女専被服科の学生たち

女専と女子大は昭和25年5月、大江の新校舎に移転。引っ越しに際しては学生たちも学校の備品を持って徒歩やリヤカーで大江—熊本城間を何度も往復した。写真は、完成したばかりの教室で熱心に針を動かす女専被服科2回生たち。真新しい教室の周りには、木もまだ植えられておらず、教室にはまぶしいほどに冬の日差しが差し込んでいる。



■女専の校章と女子大の学章

女専設立、女子大昇格に県の事務職員としてかかわった海津正清氏の案と伝えられる女専の校章と女子大の学章。校章は「女」の文字をモチーフに中央に「専」を置く。学章はこの校章をベースに作られたようで、中央の文字が「大学」となっている。



■熊本城の石垣の上で記念撮影

昭和23年ごろ、女専生活科2回生の学生たちが熊本城の石垣の上で記念撮影。背景には宇土櫓が見える。現在の天守閣付近にあった校舎まで学生たちは毎日“登城”。大木と石垣に囲まれた校舎は熊本市街を一望できる高台にあり、そこからの眺めは絶景だった。



■昭和36年4月、第13回生入学式  
講堂（当時の1号館）で行われた入学式。北村学長の祝辞の後、新入生は前に並べられた机の上で、熊本女子大学の学生として守るべきことの連ねられた宣誓書に毛筆で署名を行った。



■1年遅れの創立15周年記念式典を挙行

昭和40年5月25日、女子大の創立15周年記念式典が完成したばかりの同大学体育館で開かれた。式には県・大学関係者らの来賓約150人をはじめ、大学職員、学生約900人が参加。大江キャンパスの施設充実の最後を飾った体育館で盛大な式典が挙行された。



■熊本女子大学基本問題審議会答申が出されたころ

昭和47年5月、知事の諮問機関として熊本女子大学基本問題審議会が発足する。約半年後に提出された同審議会の答申は「熊本女子大は建学の精神に基づき、県立の女子大として存続し、一層の充実発展を図るべきである」。それを受け、女子大は改革に向けて踏み出した。



■後方に阿蘇をのぞむ大江キャンパス

写真は昭和30年代前半のころ。現在は宅地開発のため見ることはできないが、当時はキャンパスからはるか後方に阿蘇外輪山を望むことができた。校門を入ると目の前にシロ並木。ここは学生たちの憩いの場として愛され、大江キャンパスのシンボルだった。



■第1回の熊本女子大卒業生たち

昭和28年3月3日、第1回の女子大卒業生55人が卒業式に出席。写真は本館前での記念撮影。角帽に黒のガウン姿は以後、女子大卒業式の象徴となった。

# 熊本女子大学発展期 大江キャンパスの三十年

昭和二十五年五月二十九日、熊本女子大学は熊本城内の旧陸軍第六師団司令部跡の仮校舎から、熊本市大江に新築された新キャンパスに移転。以後、健軍キャンパスに移転する五十五年までの三十年間、大江キャンパス時代が続く。

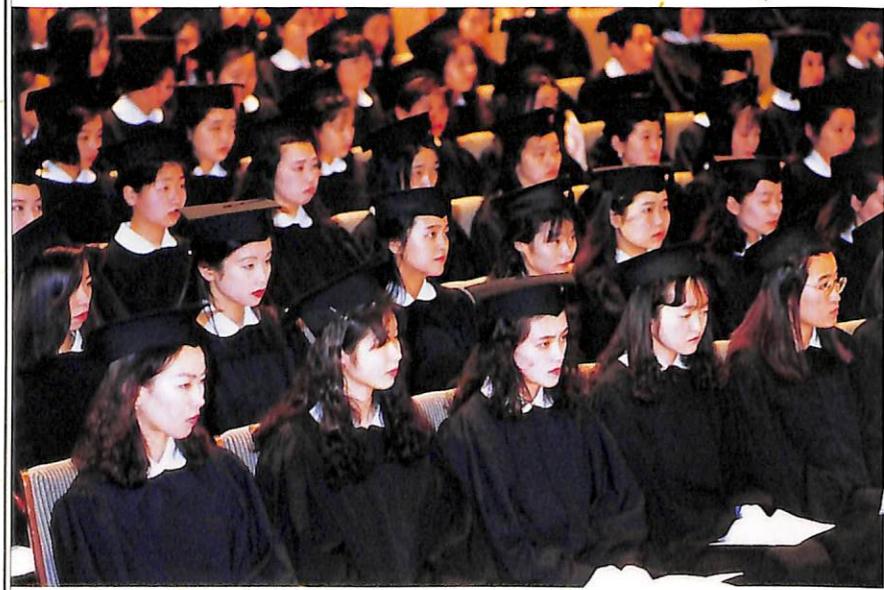
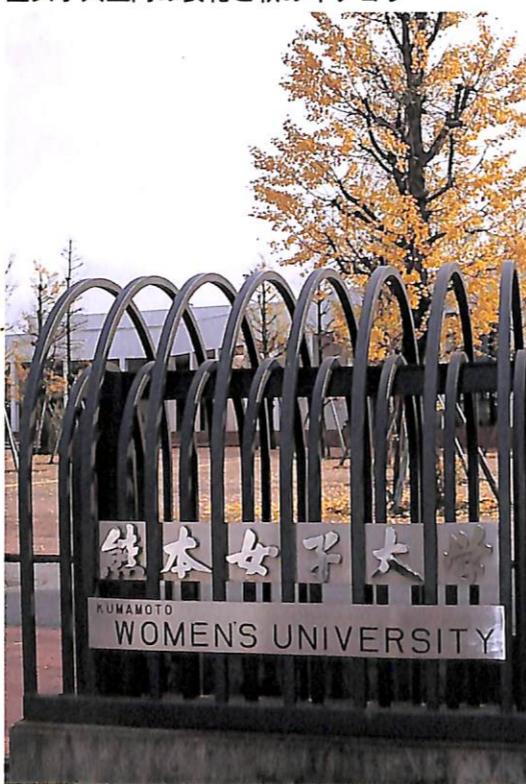
この間、五回におよぶ学科改編により組織の拡大を行い、数度にわたる建築工事で施設も充実していく。その一方、女子大廃止論も持ち上がるようになり、四十七年には県知事の諮問機関として熊本女子大学基本問題審議会が発足。女子大の存続が問われた時代でもあった。



**■平成3年4月、外国語センターを開設**  
外国语で自由にコミュニケーションできる力を育てようと外国语教育センターがオープン。LL教室4室のほか、視聴覚室やテープライブラリーを備える。学生だけでなく、中学・高校の英語教諭や社会人向けの講座も開き、地域に開かれた大学づくりの一環も担う。同センターは女子大時代の最後の改革による所産で、以後、平成6年の県立大移行により、キャンパスは大きく変貌する。

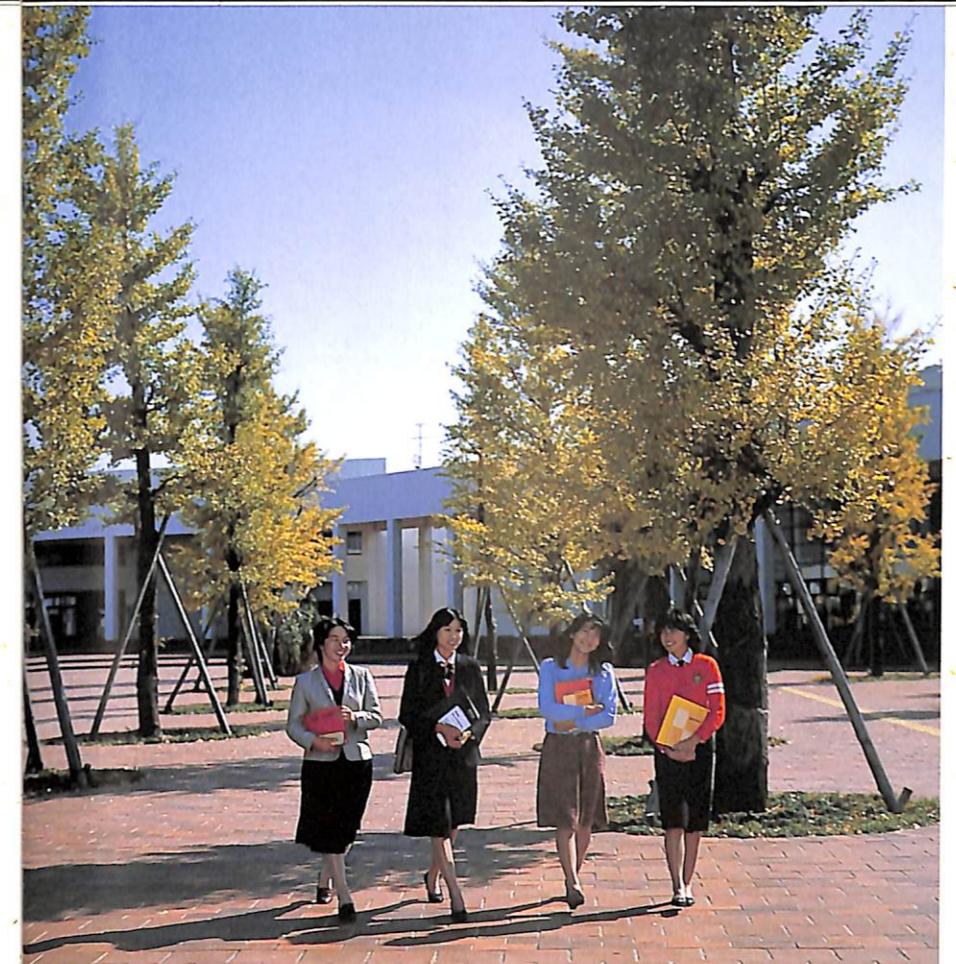


■女子大正門の表札と秋のイチョウ



■最後の“女子大生”巣立つ

平成6年3月15日、最後の“女子大生”209人が卒業。4月から県立大に移行するのを前に、卒業生たちは変わり行く母校との別れを惜しみつつ、熱いエールを送った。



■健軍キャンパス正門前の銀杏群

正門を抜けると、銀杏が林立。写真は昭和50年代後半で、木にはまだ添え木がされている。春に芽吹いた銀杏の新緑は夏にかけて次第に緑の濃さを増し、秋には黄金色に色付く。四季折々にその姿を変えながら女子大と共に年を重ねる健軍キャンパスのシンボルだ。



■盛り上がる春の恒例行事、女子大体育祭

体育祭は毎年5月に行われた。芝を一面に敷きつめた運動場に1~3年まで600人の学生が集結。5学科対抗で競技を行い、騎馬戦や綱引きなど熱戦が繰り広げられる。



■韓国・祥明女子大学校と姉妹校提携

平成元年10月、女子大は韓国の祥明女子大学校と姉妹校提携を結ぶ。翌年から、祥明大学校の学生が短期講習で女子大を訪れ、女子大からは文学部の副専攻・日本語教育課程で日本語教育実習に派遣するなど、交流が始まった。

## 熊本女子大学充実期

### 三度のキャンパス移転をへて

昭和五十五年三月、熊本女子大学は大江から健軍の新キャンパスに移転。同年四月から文学部（英文学科、国文学科）と生活科学部（食物栄養学科、生活環境学科、生活経営学科）の二学部五学科体制へと十七年ぶりの組織改編を実施した。それから四年後の五十九年三月、当時の細川県知事の私的諮問機関として熊本女子大学問題懇話会が発足。十七回の審議を重ねた後、男女共学化への移行や組織の改編・改組など大幅な改革を盛り込んだ答申を出した。



■文学部一言語や文学を通じ文化と精神を学ぶ  
日本語日本文学科と英語英米文学科の2学科および大学院文学研究科修士課程の2専攻が一体となって内外の言語や文化を講義。言語、文学、思想、文化、歴史そして精神構造の本質を見る目を養う。



■生活科学部一“衣・食・住”を科学的に研究  
写真は食物栄養学科の動物実験風景。食物栄養学科、生活環境学科の2学科で後者は住宅学と被服学の2コースに分かれる。両学科とも理論だけでなく、実験実習を組み合わせたカリキュラムで、より実践的な知識と技術を身に付ける。



■総合管理学科一少人数ゼミの実学が特徴  
アドミニストレーション（総合管理）という新しい教育分野を開拓したわが国初の学部。法律・行政・経済・経営・情報などさまざまな分野を総合的に学ぶ。1年次から少人数ゼミが必修科目となっており、密度の濃い講義が展開されている。



■「熊本女子大学」から「熊本県立大学へ」  
平成6年6月9日、熊本県立大学の発足記念式典が催された。従来の文学部、生活科学部に加えて、法学、行政学、経済学、経営学などの総合的な教育研究に取り組むユニークな社会科学系の総合管理学部が誕生した。



熊本県立大学

平成6年4月、熊本県立大学としてのスタートとともに、大学を象徴するシンボルマークが生まれた。“時代と地域の要請に応える大学”をイメージしたシンボルマークの「黒」は地域と大学の伝統を、「赤」は世界に向かって力強く伸びていく精神性と若々しい躍動感を表している。



■男女共学の総合大学として生まれ変わる  
総合管理学部を中心に、現在4学年に579人の男子学生が学ぶ。総合管理学部の約45%が男子学生。平成10年4月には同学部に大学院も新設。“環境共生学”をテーマにした生活科学部の改組計画も進み、県立大は着実に新しい歴史をつくり続けている。

# 熊本県立大学時代へ 三学部擁し、新たな出発

平成六年四月、熊本女子大学は熊本県立大学へと移行した。既存の文学部と生活科学部に加え、公共行政と企業経営にアドミニストレーション（総合管理学）を柱とする、わが国初のカリキュラムを特徴とする総合管理学部を新設。男女共学の総合大学として新たなスタートを切つたのである。

それから四年。平成十年三月、共学化後初めての卒業生がキャンパスを卒立つ。

■県立大移行により、新サークルが次々と誕生

現在、県立大では文化系24、体育系31の合わせて55のサークルが活動。なかでも男子軟式野球部は創部3年目にして連続全国大会出場を果たし、平成8年ベスト8、9年ベスト4に入った。県立大移行を機に男子部を中心に約20のサークルが誕生。学生活動がさらに活発になった。



■長い伝統を誇る弓道部



■2年連続全国大会に出場し、好成績を上げた軟式野球部



■毎年恒例、盛り上がる白亜祭

白亜の建物が林立する健軍キャンパス移転を機に、昭和55年から大学祭の名称は白亜祭に決定。以後、毎年11月の2日間にわたり、各学科の研究発表をはじめ模擬店やイベントなど、さまざまな出し物で盛り上がる。

■米国・モンタナ州立大学と学生交流協定を調印

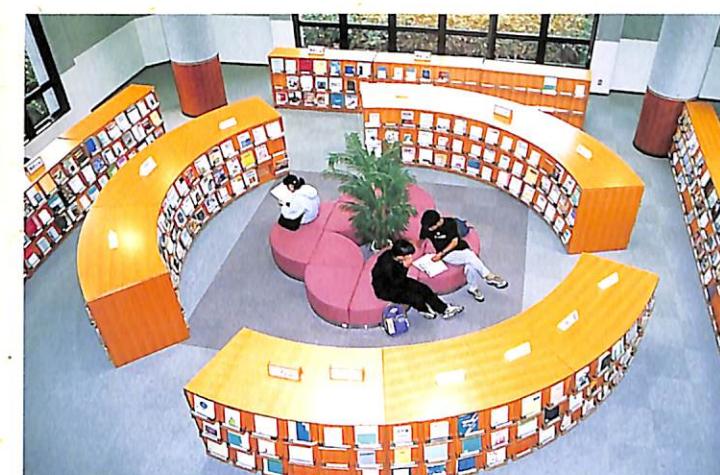
平成9年9月、熊本県と友好提携を結んでいる米国・モンタナ州立大学のボーズマン校とビリングス校と学生交流協定について調印。今年から米国への語学研修や短期留学など相互関の交流が始まる。



■ゆとりある空間が演出されたキャンパス南側一帯

総合管理学部の新設と県立大への移行に併せて増設されたキャンパス南側一体は淡いグレーで統一された総合管理学部棟と大講義棟、附属図書館が立ち並び、ベンチや彫刻を配したゆとりある空間が演出されている。

ミラーガラスと勾配屋根によるデザインが目を引く附属図書館は鉄筋コンクリート4階建て、延べ床面積は約3800m<sup>2</sup>。1階が管理・レファレンス（照会・問い合わせ部門）、2階と3階が一般閲覧室。4階が閉架書庫と特別資料室となっている。一般的な県民にも開放され、平日は夜9時まで開館。大学の持つ専門資料を無料で提供している。



■付属図書館の軽読書コーナーで雑誌を見る学生たち



■ノーベル化学賞のポール・バーグ博士による県立大公開講演会  
平成7年10月31日、米国スタンフォード大学教授のポール・バーグ博士が講演した。同博士は1980年にノーベル化学賞を受賞。「遺伝子の科学と21世紀」と題した講演で遺伝子研究の現状とこれからの展望について講演を行った。当日は学生と社会人など300人余りが参加し、熱心に耳を傾けた。





## 地域に貢献する 大学を目指し

熊本県知事 福島 譲二

熊本県立大学が開学から五十周年を迎えることを心からお喜び申し上げます。

昭和二十二年五月、熊本城内に熊本県立女子専門学校として発足以来、熊本女子大学、そして熊本県立大学と、その名称と教育研究の内容は変わりましたが、半世紀の長きにわたり学術研究の振興と地域に有為な人材の養成に果たしてきた役割には、まことに大きなものがあります。

この間、大学の発展に多大のご尽力をいただいた歴代学長はじめ教職員の皆様のご労苦に心から敬意を表します。

卒業生は既に八千人を超えており、教育、文化などのさまざまな分野で郷土の発展にお力添えをいただいてまいりました。平成六年四月に男女共学となるまでは、南九州唯一の四年制公立女子大学として女子教育の牽引的役割を担い続け、その建学の精神は本県内に留まらず、広く他県にも浸透してきましたものと思つております。

また、時代の変化と社会的要請にこたえるため、常に県立の大学としてのあり方を模索しながら着実に改革整備を進めてまいりました。特に、昭和五十五年には、大江キャンパスから現在地への移転と学部改組という大きな整備を行ったところであります。

平成三年の知事就任当時、社会の諸情勢は経済

構造の変動、技術革新の加速化、国民の価値観の多様化、女性の社会参加の拡大など、急激に変化してきておりました。

このような中、本県がこれから豊かで活力のある地域社会を築き上げていくためには、時代の変化に柔軟に対応できる能力と未知の分野を開拓していく創造性にあふれた人材を養育することが何より大切であり、また、地域に根ざした地域に貢献する大学としてさらに充実発展を図つていくことが県立大学としての責務ではないかと痛感いたしました。

このため、平成六年四月、関係者の皆様や県民のご理解をいただきながら社会科学系学部を創設し、全学男女共学へ移行するとともに、名称も熊本県立大学と改称するという大規模な整備を行い、さらなる飛躍に向けて新たにスタートしました。

開学五十周年にあたる平成九年の三月に熊本女子大学に入学した最後の学生が卒業し、平成十年三月には、熊本県立大学として入学した初めての学生が卒業するということからも、大きな節目の年であります。

学術振興と人材要請を担う大学への期待がますます高まっている中、大学の皆様とともに県立大学のさらなる充実・発展を図つて参りたいと思つております。



■開学50周年記念式典を挙行

女優、熊本女子大、熊本県立大と、3度の新生、3度の所替えを経て、平成9年、県立大は創立50周年を迎えた。10月19日に同大大講義室で挙行された開学50周年記念式典には、大学や県関係者をはじめとする約350人が参加。新しく制定された大学歌「宙へ」も初めて披露され、未来へ向けた一步も記された。



■350人集い、盛況をはくした開学50周年記念祝賀会

開学50周年記念式典に続いて、会場を熊本テルサに移し記念祝賀会が催された。福島譲二県知事をはじめ、県立大の姉妹校である韓国・祥明大学校、米国・モンタナ州立大学ほか、関係者や同窓生など350人が参加。県立大50年の歩みに重ねた自らの軌跡に思いをはせる同窓生を中心に、会場はおおいに盛り上がった。



## 多くの個性持つ 大学に誇り

後援会会長 源 寧生



## 熊本県政の歩みと 共に成長

県議会議長 山本 靖

熊本県立大学の開学五十周年を衷心よりお祝い申し上げます。

県立大学は、昭和二十二年熊本県立女子専門学校として創立され、昭和二十四年九州初の女子大学へと発展され、女子教育の中心として地域社会に多大の貢献をしてこられました。さらに平成六年四月には男女共学の総合大学となり、総合管理学部も新設されました。創立以来の卒業生は既に八千人を超えて多くの先輩方が県内はもとより国内外において目覚ましい活躍をされておられ、その素晴らしい業績が県立大学発展の礎となっています。

この五十年の歩みは、戦後の熊本県政の歩みと重なり、県立大学の発展の歴史を振り返ることは熊本の発展の歴史を振り返ることにもなります。

昭和二十二年五月、英文科、保健科（女専二回生から生活科に改称）および被服科の三学科で開学した熊本県立女子専門学校も昭和二十四年四月に学芸学部文学科および生活学科の一学部二学科の県立熊本女子大学となりました。その後、学部学科が増設され、学生定員も増え、充実が図られました。そして、現在では文学部、生活科学部および総合管理学部の三学部を擁する男女共学の総合大学に成長されています。

県立大学では三つの理念、すなわち「総合性へ

熊本県立大学開学五十周年をお祝い申し上げます。

昭和二十二年、その呱呱の声をあげて以来、常に時代と地域の要請に応えながら、社会に家庭に多くの有為な人材を輩出してこられた歴代の大学関係各位のご尽力に深甚の敬意と感謝の意を表する次第であります。

昭和から平成への五十年間ほど、私どもの社会環境、日常生活、価値観が大きく激しく変貌した時は未だかつてなく、今日、それらはさらに変化のスピードを速めながら、われわれに新たな体験と対応を求めつつあります。

特に、国際社会との関わり抜きにはありえない昨今、グローバルな視野を持ち、知識を収集して実社会に生かし得る総合力を有する人材の育成が急務であることは申すまでもありません。

そのような中で、熊本県立大学が「総合性への志向」「地域性の重視」「国際性の推進」の三つの理念のもとに、次代を見据え、最高学府としての教育と研究に心血を注がれていることは、まことに心強い限りであります。

ほかに類のない総合管理学部の開設、大学院の設置、あるいは外国语教育センターの県市民への開放など、大学組織の強化と充実を図られる一方、韓国の「祥明大学校」との姉妹締結、米国「モン

の志向」、「地域性の重視」および「国際性の推進」を掲げられ、「学問の府」ならんことを目指し、特に地域性を重視し、この観点に立って世界に県立大学の教育・研究の内容を発信し、あるいは逆にグローバルな考えを積極的に取り入れるべく日夜研鑽されているところであります。

今後、社会が大きく変化することが予想される環境においては、リカレント教育など県民や地域社会の県立大学に対する期待がますます高まるものと思われ、学長をはじめ教職員各位におかれは、より一層、教育と研究を通して二十一世紀社会を支える自立心と創造性に富んだ人材の育成にご努力いただくことを念願しております。

開学五十周年を契機として、県立大学が今後さらなる充実発展されることを祈つてやみません。

タナ州立大学」との学生交流協定の締結をはじめ、「アジアネットワークフォーラム」への参画、留学生の交換など、学内外に国際的な活動を開催しているところであります。これらの取り組みは極めて意義深く時宜を得たものと存じます。

開学五十周年という歴史的節目を迎えた県立大学が、地域社会に根ざしつつ、更にその特性を生かしながら、新しい時代に向け、より一層の躍進を遂げられんことを祈念して止みません。



## 第一章 思い出を語る

### 開校五十周年に寄せて

熊本県知事 福島 譲二  
県議会議長 山本 靖  
後援会会長 源 寧生  
紫苑会会長 矢住 ハツノ

寄稿 第四代学長 阿波 保喬  
第七代学長 松垣 裕  
名誉教授 山本 捨三

〃 〃 〃 〃 矢上 一夫  
友田 熱  
宮島 昭二郎

座談会 第一部

「熊本城内の仮校舎から大江に移行」

第二部

「女子大から共学の県立大に移行」

20 19 18 17

37 31 30 29 28 27 26 25 24



# 8000人超える 卒業生巣立つ

紫苑会会長 矢住ハツノ

熊本県立大学開学五十周年を迎えてお喜び申し上げます。

会員八十八人で熊本県立女子専門学校の同窓会として昭和二十五年三月に発足しましたが、大学卒業一回生二百五十七人を加え、昭和二十八年三月に女子大学同窓会として改めて発足いたしました。平成九年三月現在で、会員数は八千四百六十三人です。

五十年という歳月の流れの早さにはただ驚くばかりでございますが、この間の大きな動きを振り返ってみると、昭和三十五年から三十七年にかけて関東・鹿児島・宮崎・福岡・関西の順に各支部が発足されました。昭和三十六年には旧大学敷地内の学寮に廊下統一で同窓会館を建設いたしました。二十坪の平屋でしたが、和室では茶の湯、生花、琴の練習など、学生のクラブ活動のようどころとなり宿泊の利用者も多かつたようです。十年後に同窓会館を熊本県に移管しました。

さらに同窓会第一号を発行し、その後昭和四十七年には会報名を「紫苑」とし現在に至っております。

また、大学の学生部や先生方からの要望により「結婚相談室」を開設いたしましたのもそのころでございますが、多くの方々の縁結びをした相談室も若い方たちの結婚観の違いもあり、成立件数

も少なくなりましたので二十年間開かれておりました相談室を平成八年度で一応閉じることにいたしました。

さらにまた、昭和四十七年十二月に熊本女子大学基本問題審議会から出された大学の充実強化について知事への答申・昭和五十五年三月の新学舎への移転・昭和五十五年九月に三十周年記念誌を発行・昭和五十五年十月に婦人裸像一体を大学へ寄贈、除幕式を行う。昭和四十七年以降も度々論議された女子大学存続運動など、紙面の都合で全部を語り尽くせませんが、五十年を振り返ってみまして充実した同窓会活動であったと思います。

大学設立五十周年を迎えるにあたり、大学の記念事業と併せて紫苑会では「初代学長北村直躬先生の胸像」と県立劇場内に「熊本女子大学跡」として記念碑を建立し、また記念講演会などを開催いたしましたことは紫苑会といたしましてこの上ない喜びと存じます。

熊本県立大学のますますの御発展を会員一同、心から願っております。今後共、紫苑会へのご指導、ご支援を何卒よろしくお願い申し上げ、ございさつといたします。